

商人が澤山あつた。これもそれと似寄の話で、矢はり十七年の秋と思ふ。わたしが父と一所に四谷へ納涼ながら散歩にゆくと、秋の初めの涼しい夜で、四谷傳馬町の通りには幾軒の露店が出てゐた。その間に薙を敷いて大道に坐つてゐる一人の男が、半紙を前に置いて頻に字を書いてゐた。今日では大道で字を書いてゐても、錢を呉れる人は多くあるまいと思ふが、其頃には通りがかりの人が其字を眺めて幾許かの錢を置いて行つたものである。

私等も其前に差懸ると、うす暗いカンテラの灯影にその男の顔を透して視た父は、一間ばかり行き過ぎてから私に二十錢紙幣を渡して、これを彼の人に與つて来いと命じ、且つ與つたらば直に駈けて来いと注意された。乞食同様の男に二十錢札は些と多過ぎると思つたが、云はるよまよに札を擱んでその店先へ駈けて行き、男の前に置くや否や一散に駈出して来た。これに就ては、父は何にも語らなかつたが、恐らく前のおでん屋と同じ運命の人であつたらう。

この男を見た時に、『霜夜鐘』の芝居に出る六浦正三郎といふのは斯んな人だらうと思つた。其時に彼は半紙に對つて『……………茶立虫』と書いてゐた。上の文字は記憶してゐないが、恐らく俳句を書いて居たのであらう。今日でも俳句其他で、茶立虫といふ文字を見ると、夜露の多い大道に坐つて、茶立虫を書いてゐた浪人者のやうな男の姿を思ひ出す。江戸の殘黨は斯んな姿で次第に亡びて了つたものと察せられる。

## (八) 長唄の師匠

元園町に接近した麴町三丁目、杵屋お路久といふ長唄の師匠が住んでゐた。その娘のお花さんと云ふのが評判の美人であつた。この界隈の長唄の師匠では、

これが一番繁昌して、私の姉も稽古に通つた。三宅花園女史もこよの門弟であつた。お花さんは十九年頃の虎列刺で死了つて、お路久さんもつといて死んだ。一家悉く離散して、その跡は今や坂川牛乳店の荷車置場になつてゐる。長唄の師匠と牛乳商、自然なる世の變化を示してゐるのも不思議である。

蟹

六月廿七日、昨夜來の雨は止まない。梅雨頃の天氣癖といふ白映黒映を折々に見せて、或は明るく或は暗く、究竟は一日降暮すのであらうと思へば、鬱陶しいこと夥多しい。殊に自分は昨日から足を痛めてゐる。蹩勝五郎ほどでないが、兎にかく山本勘助の家來ぐらゐにはなつてゐる。愈よ鬱陶しい。昨日の午前、O氏を麴町區役所に訪うて歸る途中、同所の石段で誤つて下駄を踏み返した。その當時は差したる疼痛も感じなかつたが、午後から右の足首

が漸次に痛み出して、殆ど隻脚は踏み立てられないことになった。醫師の診断によると、骨には別に異状もないが、筋が伸びたのだとのことで、患部には巻法を行ひ、繃帯を施して、二三日は歩行禁止を宣告せられたのである。

昨日に比べると、今日は疼痛も稍薄らいだが、右の隻脚は矢はり自由でない。寝てゐるほどの大病人でもないから、繃帯した足を投げ出して、机の前に茫然してゐる。二三種の新聞の社説から廣告欄まで残らず讀んで了つて、時計を見ると午前八時。若葉の雨は音もせず烟つてゐる。

二階から見ると、隣の庭の杏子が過日の風雨に吹き落されて、青葉がくれに二つ三つ紅く残つてゐる。小兒が太鼓を叩く音が聞える。何處か知らないが、折々に枝蛙が鳴く。

頭腦に故障が無くても、身體の一部に故障があると、書物を讀んでも氣が乗らず、物を考へても纏らない。僅に常用の葉書一枚を書き終つて、所在なく烟

草を喫む、庭を眺める、空を見る。雀の聲が聞えて、空は少しく明るくなつたかと思ふと、又瀟々と降つて来る。やがてざつと云ふ音がして、樋算の水が瀧のやうに溢れ落ちる。雨戸を閉めようと思つても、自分は容易に起たれない。家内の者を呼んで閉めさせる。序に戸棚の書物を出して貰はうとしたが、女共には急に探し當らない。結局には小悶つたくなつて、跛足を曳きながら自身で探しに行く。少しく力を入れて踏むと、足は矢はり痛む。一冊の書物を探し出すのが大仕事だ。餘り馬鹿々々しくなつて、もう何を讀む元氣も無く、折角探し出した書物を枕にころりと寝る。

折柄、S氏が訪ねて來た。某座の七月狂言に私の脚本を演ずるに就て今日は其稽古に臨む筈であつたが、何分この始末であるから御供は出來ないと断る。約一時間ばかりは芝居の話で紛れてゐるが、S氏が去ると又寂しくなる。再び雨戸を明けさせて庭を眺めると、雨は小歇となつた。板塀には蝸牛、楓の下に

は蚯蚓の死骸、梅雨中の景物は遺憾なく陳列してゐる。こんな狭い庭では仕方がない、英國大使館前か清水谷公園の廣場へ行つて、雨に濡れた若葉の林に、傘をかざして徘徊するのも又面白からうとは思ひながら、跣足の足駄穿では到底能ぬ藝だ。あゝ、詰らないとぐつたりして又寢轉ぶ。風が少し出たらしい。庭の青葉が揺めいて、檐を撲つ雨の音が耳に付く。時計を見ると十時を過ると廿分、けふの半日は實に長い。

私は絶えず沈黙考といふ質であるが、もう斯うなつては何を考へる元氣もない。また這ひ起きて北の窓をあけて見る。筋向ひのK氏の庭は碧梧、石榴、無花果が唯一面に眞蒼で、折柄の風に青い波を打つてゐる。それも臆て見飽きて再び机の前に復る。相變らず所在がないので、今度は壁を睨んで達摩大師の座禪といふ形で、何を見るときも無しに眺めてゐると、やがて一匹の蜘蛛が何處からか這ひ出した。退屈の時には斯んなものでも見逃すことは出来ない、一心に眼

を据ゑて、その行方を打守つてゐると、彼はする／＼と欄間を傳つて、果は掛額のうしろへ姿を隠した。扱は額の裏に巢を組んでゐるのかと思つたが、起ち上つて検査するのも面倒と、唯うつかりと眺めてゐる中に、蜘蛛の形から聯想したのであらう、不意と蟹のことを思ひ出した。蟹は一本の足を失つた蟹である。過る十六日の雨ふる朝、わたしの庭へ一匹の赤い蟹が迷つて來た。捕へて見ると、左の足が一本折れてゐる。恐らくは近所の子供に繋がれてゐる中に、故意か偶然か糸を結んだ足が折れたので、彼は漸く自由の身となつたのであらう。足が折れなければ、彼は依然として繋がれてゐたかも知れない。彼は一本の足を失つた代りに、一身の束縛を逃れたのである。彼は寧ろ片輪となつても、其身の自由を得たのを喜んでゐるかも知れない。けれども、私はこの不具な蟹に對して、云ふべからざる悲哀を感じた。其日は我家に飼つて置いて食物を與へ、翌十七日の朝、これを五番町の大溝へ放して遣つた。溝はお堀につゞいてゐる

から、彼も再び子供の手にかよらず、恐らく安全の棲家を得たであらう。昔話  
 ならば、蟹が其夜の夢にあらはれて、私に禮の一言も云ふべき所であるが、一  
 向にそんなことも無かつた。

あの蟹は今頃何うしてゐるだらう。私も今や隻脚の自由を缺いてゐる。所謂  
 同病相憐むの意味からしても、蟹の身の上が案じられて成らない。私の足の  
 疼痛は差したることでも無い、三四日の後には確に癒る。が、蟹の足は再び生  
 へることはあるまい。彼は一生を不具者として送らねばならない。五番町の大  
 溝からお堀へかけて、石垣の間には澤山の蟹が棲んでゐるらしい。不具者の彼  
 はその仲間に伍して、何等の迫害を蒙ることなしに、悠々と一生を送られるで  
 あらうか。鳥類、殊に鴉のごときは一種の團結心に富んでゐて、ほかの土地か  
 ら舞ひ込んだ旅鴉と見れば、大勢が集つて散々に窘める。蟹の仲間にはそんな  
 習慣は無いであらうか。今日のやうに雨ふる日、他の蟹は思ひくゝの穴に潜ん

でゐるにも拘はらず、他國者の彼は身を隠すべき處もなく、雨に濡れつゝ石垣  
 の上を彷徨つてゐるのではあるまいか。加之も彼は一足を失つてゐる不具者で  
 ある。

寧そ私の家に何日までも飼つて置たら、こんな苦勞をせずとも濟んだのであ  
 る。が、如何に愛育されても、彼は一種の牢獄のやうな桶や籠の中に飼はれて  
 ゐるのを喜ばないかも知れない。たとひ多少の迫害や困難を凌いでも、彼は堀  
 や溝に自由の天地を求めてゐるかも知れない。

こんな空想に時を移して居る内に、もう午餐の仕度が出来たといふ知らせが  
 ある。起たうとしても一方の足が自由で無い、二階の階子を這ふやうにして降  
 りるのは中々の難儀である。それに付けても、蟹は何うして居るであらう。庭  
 を見れば、雨は又一雲時はけしく降る。お堀の水も定めて増したであらう。

白魚物語

(一)

白魚、その名を聞けば一種云はれぬ詩的の聯想を喚起して、霜を照す沖の篝火を思ひ、雪を掬ふ夜半の四手網を想ひ、更に爪紅さしたる美人の指の白きを忍ぶ。彼の蕉翁の『價あるこそ恨なれ。』の一句は云ふに及ばず、江戸時代より現時に至る二三百年の間、あらゆる詩客俳人の錦繡腸を絞り盡させた斯魚の價

抑も幾許ぞ。仔細にこれを穿索すると、また自然なる趣味を覺えて、筆に上すべき幾多の材料が無いでもない。

日本では普通に『白魚』と書くが、これは別に仔細は無い、要するに白い魚であるから白魚と呼來つたものであらう。漢字では春魚、銀魚、膾殘魚、謝約魚などと書くさうだが、所謂る白魚と果して同種類の物であるや否や判然しない。漢詩では普通に膾殘魚または謝約魚と歌ふ。一説に膾殘魚は鱮、謝約魚は松魚だといふもあるが、左の詩を読めば自から明瞭であらう。

浅浦詞

溪琴

三郎詞畔釣人居。二月春江潮上初。生石東風猶送雪。家家爭罾膾殘魚。

夏初過墨水

雪江

綠暗長堤午雨餘。磯邊只認一簑漁。上罾白小猶多味。也是江東謝約魚。但しこれは何れも日本人の作であるから、この他にも正當の漢字、適當の漢名

があるかも知れぬが、差當り取調べる便宜がないから姑くわが知れるだけを書いて置く。

白魚の系圖調べをするに當つては、先づ其名所たる佃島の由來を説かねばならぬ。佃島に就ては從來多少取調べた人もあるやうだが、左に掲げたのは魚河岸某家の記録の書寫で、いさよか他と異なる節もあるから、原文に依て其の節を抜萃した。兎に角に好古者の參考まで。

天正年中(案ずるに十年か)恐れながら東照宮様御上洛遊ばされ候砌、多田の御廟並に住吉明神へ御參詣の節、同所神崎川渡場に船御座なく、安藤對馬守様御下知にて佃村孫右衛門へ仰付けられ、即ち同人支配の漁船を以て、神君を始め奉つり、御供の多勢御渡申候。其節庄屋見市孫右衛門方へ御立寄、暫く御休息遊され(中略)素湯召上られ候處、屋敷内に大木の松三本有之候を御覽遊ばされ、木を三つ合はすれば森と

申す文字なり、向後森孫右衛門と名乗申すべき旨御懇の御上意を蒙り有難き仕合に存じ奉り候。云々。  
右の文中に『多田の御廟に御參詣云々』とあるは徳川家を憚つて斯く記したので、實は明智が謀叛の砌、家康主従夜に紛れて都を落ちた途中の事であらう。その縁に依つて、家康が江戸開府の後、彼の森孫右衛門等もつゞいて出府したものと見える。また、同記録に曰く。

天正十八年、大阪より關東へ森孫右衛門一族六人を召連れ罷下り候。江戸着、安藤對馬守様へ届出候處、御屋敷に休息仰せ付られ、對州様より申上候處、神君、孫右衛門一族無事着の儀御満足に思召、即ち對馬守様を以て御本丸御菜御用相勤め申すべき旨仰付けられ候に付、孫右衛門頭取仰付けられ、又々支配の漁師三十餘人罷り下し、暫く對州様御屋敷に罷在、専ら漁業に従事致し候事。其節、海濱の近き小島を

借地し、漁業を開設候事。云々。

右に記せる『海濱の近き小島』といふのが、即ち今日の佃島で、攝州佃村の漁師がこよに移住したので、取あへず其島の名を佃と呼だものであらう。こよへ本國の住吉明神を勧請して、佃の一島を自分等の漁場を定め、一同漁業に従事してゐる中に、ある年の冬、雪の如き小魚が圖らず網に罹つたので、漁師共が打寄つて色々評議を凝したが、攝州生れの漁師共は從來會つ見ざるの魚で、何といふ魚か更に鑑定が付かぬ。その中に、漁師の一人が其魚の頭に葵の紋がありくと現はれてゐるのを發見して、葵は云ふまでもなく徳川家の紋所、さあ大變だと俄かに騒ぎ出して、早速その魚を添へて安藤對州のもとへ届出た。對州から更に其の趣を申上げると、豈測らんや、漁師よりは將軍様の方が先刻御承知で、こよに白魚といふ鑑定が付いた。

その節、家康曰く。予が生國三州にありつる頃、濱の漁夫共常に斯魚を網して、予の食膳に供へし事あり。然るに今また斯の東武に於て測らず斯魚を見ること、誠に我家萬代の吉兆なり。めでたし／＼と、無闇に縁喜を祝つて、殊の外御賞美あつたので、佃の漁師共も大いに面目を施して引退つたと云ふ。白魚も誠に運の好い魚で、一別以來こよに家康公に邂逅つて、俄に其名を世に知られる事になつた。

その常座は御膳白魚と唱へて、將軍の御膳に供へる他は妄に賣買するを許されず、家康一代は御止魚といふ勿體が付いてゐたから、攔めば消えるやうな小魚も實に東海魚族中の最高位を占むる幸運を荷つた。

御止魚の禁は家康一代に止つて、その後は自由に網し、自由に賣買するを許されたので、何でも珍しいもの喰はうが人情、その禁が解かれると同時に、網の目から手が出るとは誠に斯事、我もくと白魚を注文するもの夥多しく、連も一網や二網では限りなき要求に應ずることが出来ぬほどの勢ひとなつた。で



あるから、これまでは單に献上物として、冬季にわづか一度か二度網した魚を、その後は殆ど佃全島の本業として、惣懸りで網するといふ始末。勿論、最初は大漁といふほどの獲物もなかつたらしいが、この魚頗る江戸の水に適したと見えて、年一年に繁殖して、後には佃と云へばすぐに白魚を聯想するほどの江戸名物と成済した。

一説に依ると、幕府でその繁殖を圖る爲めに、寛永の末年、彼の三州から白魚の胤を取寄せて、淺草川の上流に放したとも云ひ、或は尾州の浦から取寄せたとも云ふが、その眞偽は判然せぬ。兎にかくに白魚は江戸の水に生れた江戸前の魚として、江戸人士に賞翫されたこと云ふまでない。

江戸が繁昌に赴くに連れて、この白魚もいよく時を得て、淺草川の海苔と白魚、この二つが江戸名物の兩關と讃へられて、鍋は白魚に生海苔、貝の柱に萌し三葉、これが初春の紋切形で、彼の卯月の鯉魚と一般、これを喰はぬ者は

殆んど江戸つ兒の恥のやうになつて了つた。むかしの川柳にも「一別以來白魚は海苔に逢ひ」などといふ秀逸がある。併し白魚は上下一般の膳に上るだけに、その價も廉くない。兎にかく鯉魚、鰻、白魚を喰ふなどと云ふ事は、いづれも喰好みの贅澤の中に數へられてゐた。彼の三馬の四十八癖の一節に「その癖に旨へ物喰で、白魚を十ちよほばかり玉子いりからりと煮付けて、喜撰の煮花の苦いやつでお茶漬を喫べやうの、云々。」

(11)

今も昔も白魚は寒の入から立春の頃を盛とする。春三月、梢の櫻が漸く紅らんで來ると、白魚は次第に生長して腹に卵を持つやうになる。随つてその相場

も下落する。要するに寒い間が斯魚の生命である。また不思議に晝は決して姿を見せぬから、これを網するには、何うしても昔の四つ、今日の午後十時頃から後でなければ思はしい漁がない。

季節は寒中、時刻は夜半、漁師に取つては随分の難儀お察し申すが、これがこの島の本業同様であるから、一島擧つて白魚船に乗出すので、沖には無数の船を見る。白魚網は所謂の四手網の類で、幅は疊半疊ぐらゐる、これを以て火かきに寄る魚を掬ふので、船毎に波を照す篝火を焚く。むかしは佃島附近から永代沖、遡つては隅田の川筋まで、夜毎にこの白魚船を見たとき云へば、霜夜漸く更けて、川風さむく千鳥啼く波間隠れに、無数の篝火遠く近く亂るゝ圖、確に江戸名物と誇るべき好詩景であつたに相違ない。いさり消えて不知火の佃魚白し其頃の光景が實に思ひ遣られるではないか。

白魚の網に入るは最も引汐の頃を可とするさうで、漁船は夜もすがら篝火を

焚く。成るべく闇を便宜とすること勿論であるけれども、月夜、雨の夜、風の夜、一切頓着なく、その季節中は大抵夜毎に舟を出すので、餘寒冴返る初春の夜に残んの雪かと紛ふ白い魚を網するなど、風流と云へば頗る風流だが、實に寒い事この上無しであらう。

御止魚の禁は家康一代であつたけれども、其後も代々將軍の御膳魚となつて、それが爲に白魚の御納屋が設けられてあつた。即ち今日の白魚河岸と唱へるのが其の御納屋の舊跡で、佃で網に入つた白魚の走りは、先づこの御納屋に献納し、而して後に魚河岸の市へ持出すのが、舊幕時代の恒例であつたと云ふ。

浅草川の流れは絶えずして、而も舊の水にあらず。その流れに浮ぶ白魚も世の變遷に連れると見えて、さしも江戸時代に全盛を極めた白魚も、維新以後に大いに衰へたと云つて、白魚其物が都人に飽れたでもなく、捨られたでもなく、魚は依然として世に賞美されてゐるが、如何にせん、維新以來、魚は年々

に減少して殆ど昔の十分一ともいふべき有様。これは徳川様の代が變つたので、葵の御紋を頂く白魚も自然と消えて了ふのであらうとは、佃さては魚河岸連の喰く所。果してそんな理窟があるか知らぬが、兎に角この白魚に限らず、東京灣近海の魚類が近來一年々に減少するのは疑ひもない事實で、白魚も憂には洩れぬ同じ運命を荷つてゐるのであらう。

佃島の漁業は、むかしより鰯と白魚とを専一とし、維新前は六人と稱する鰯舟の船主三十軒餘もあつたと云ふが、當時は六人船の持主僅に二人に減じた。他の小職漁師は白魚網のほかに、張網、夏網、打せ網等を用ゐて、蝦、竹魚、沙魚、雜魚等を漁り、島は昔ながらに繁昌してゐるが、名物の白魚は何分にも思はしい漁がない。勿論、皆無といふ譯ではなく、今も冬から春へかけて幾分の漁はあるが、一年に白魚船の數を減じて、佃の不知火といふ篝火も曉の星かとばかりに、次第に薄く、次第に疎らになつたも是非がない。

佃島附近のみでなく、永代から廻つて隅田の川筋にも今猶多少の白魚を見る。けれども、近來彼の川筋も巡航船または川蒸汽の爲に暴されて、百本杭に鯉寄らず、隅田川に白魚稀なりといふ始末。二月三月の交となれば、橋場最寄で折に網に上ることもあるが、近來は其上流に諸會社の工場が建築されて、種々の瓦斯を含んだ水が流れ落ちる爲に、可憐ら白魚も一種の臭氣を帯びて、これを噛めば齒牙三日香しといふ昔の風味を減じたやうに思はれる。

但し佃附近で網する魚は、今でも「江戸兒」と唱へられて、河岸では幅を利してゐるから、江戸名物を全く失つたと云ふ程でもない。

斯くの如く、佃の白魚が年々減じて行くにも拘はらず、東京府下の料理店その他では相變らず白魚を膳に上せてゐるも不思議であるが、その仔細を探つて見ると、別に不思議でも何でもない。交通便利の世に連れて、各地方から續々輸送されるので、河岸へあつまる白魚の六七分は三州の前芝村から産出するだ。白魚と云へば、昔から江戸の水に湧くもの、即ち正銘擬無しの江戸兒とのみ信じてゐるのは大きな間違で、鰻にも江戸前と旅鰻あるが如く、白魚にも「江戸兒」と「旅」との區別あることを知らねばならない。

白魚は江戸の海にのみ産する魚でなく、彼の家康の本國三州は云ふに及ばず、伊勢の海にも尾張の浦にも産するので、維新前にも伊勢の桑名邊から折々に白魚の乾干を輸送して來た事もあるが、維新以後、彼の三菱の郵船が航海を始めると同時に、彼の桑名から盛に白魚の輸送を試みたが、まだ其頃は東京産の白魚が著しく減少せぬ時代であつたから、何分思はしい結果がなかつた。然る

に其後十四五年を経て、東海道列車の開通と同時に、彼の三州前芝産の白魚が、初めて東京の魚河岸市場に現はれて、竟に今日の優勢を占める事になつたので、當時の東京人士が賞翫する白魚の六七分は前芝産、残りの三四分が佃の本場所及び伊勢尾張の産といふ有様で、魚河岸に現はれる白魚の大半は都て前芝産、即ち所謂「旅」である。

その前芝村といふのは、愛知県三河國寶飯郡にあつて、三州三大河の一といふ豊川筋の下流に突出してゐる船着の小都會で、その海面に産する白魚は實に夥多しいものだといふ。この村民が白魚を網するのは江戸の佃よりも遙かに昔の事で、已に永祿年中、時の領主（即ち徳川家）より同村の漁師十四人を限つて白魚漁の特許權を與へられ、その者共より網年貢として年々若干の米と金を上納し來つたが、交通不便の維新前には江戸へ輸送する事などは思ひも寄らず、僅に岡崎若くは名古屋へ積出す位の事で、前芝の白魚も更に世に聞えなかつた

が、世も明治となつて東海道列車開通の曉、初めて汽車便を假りてこれを東京へ輸送することとなつた。

前芝の白魚網は佃の四手網と違つて、頗る大きく長いもので、水陸相應じて一度に數百尾を網するのであるから、眞の大漁といふ場合には、殆ど其の始末に困る位だといふ。随つて、運賃その他を合算しても、東京産の白魚よりも甚だ廉價で、殆ど半額ぐらゐの相場も無理はない。

斯る次第で、佃その他の「江戸兒」は前芝その他の「旅」に壓倒されて了つたが、仔細に取調べると、江戸兒は又自から江戸兒の特色がある。先づ第一には其魚の色澤が違ふ、東京産の白魚は其名の如く純白、寧ろ稍や蒼味を帯びて、さながら磨ける玉のやうに透明で清淨で、試みにこれを把つて透して見ると、エツキスクワウゼンを假りるまでもなく、その脊髓骨が一貫して歴然と窺はれる。X 光線の作用を假りるまでもなく、その脊髓骨が一貫して歴然と窺はれる。併し前芝その他の旅となると、その魚が決して純白でない、一種の黄い土色の

暈を帯びて、その肉が東京産のやうに透明でない。これは強ちに商賣人の鑑定を要するまでもなく、如何なる素人でも試みにこれを比較して見れば、一目瞭然、すぐに「江戸兒」と「旅」とを區別することが出来る。

第二に江戸兒は決して煮崩れがしない。例へば之を椀に盛らうが、鍋に沸さうが、旨煮に煮付けやうが、首尾依然として更に其の形を崩さないのが特色である。併し旅の魚は兎かくに煮崩れがして、これを盛出した時に甚だ體裁を損する嫌がある。旅の魚を用ゐる場合には、先づこれに少量の鹽を振かけ、皮肉を固めて後に煮るといふ。

これ等の點から考へると、江戸名物と誇るだけに、佃その他の白魚は確かに彼の「旅」に勝つてゐるに相違ない。併し肝腎の味ひに至ると、未だ何方にも團扇が揚げられぬ。前芝その他は魚も多く、随つて價も廉く、東京産は魚も少く、随つて價もこれに倍するといふ始末であるから、品質の高下如何は姑く措

いて、兎にかく「旅」に壓倒されるのも誠に餘儀ない事であらうか。  
 「價あるこそ恨なれ」と云つた時代は何の位の價であつたか知らぬが、維新前  
 後は佃の白魚一チヨボ三十六文内外であつたといふ。今更あらためて註するま  
 でもないが、白魚はその數廿一を一チヨボと唱へ、二チヨボ又は三チヨボと計  
 算するのが古來の習慣で、これに就ては種々の説を傳へる者があつて、右はチ  
 ヨボ一といふ意味で、賽の目を一から六まで數へると其の數恰も廿一となるか  
 ら、チヨボは樗蒲なり、即ち賽一個といふ意味だと解釋するのが先づ普通らし  
 い。けれども、佃その他の人々は、決してそんな野卑な意味から來つた名では  
 ないと、極力その辯解に努めてゐると云ふから、チヨボの字義判然せずと逃  
 けて置くのが、斯のところ先づ無事穩當であらう。  
 白魚は前にもいふ如く、専ら引汐時に網に入る魚であるから、網から出た當  
 時は種々の海藻又は芥屑に包まれて、随分汚いものであるのを、幾たびか眞水

で洗ひ淨めて、さながら盛蕎麥を列べたやうに、一チヨボづつ一山に盛り分け  
 て、一個の杉の箱の中に幾チヨボも列べて盛る。但しこれは江戸兒流で、前芝  
 その他では一個の箱に一合又は二合づつ平詰に詰めて來る。當時は、佃の白魚  
 一チヨボ十五六錢、前芝の白魚一チヨボ七八錢位の相場だが、其年の漁不漁に  
 依て相違あるは勿論の事、同じ年の中でも歳末春初の走りと花見頃の卵持とは  
 大いに價を異にすること恰も彼の若鮎と落鮎と同様である。花見頃になれば、  
 一チヨボ三四錢ぐらゐに下落すること珍らしくない。  
 何物も走りや賞翫するのが世の人情であるから、上等の料理店その他では  
 白魚季節となれば價を問はず注文する。白魚の走りが初めて河岸へ顔を出す時、  
 各問屋では多少を論ぜず、わが馴染の各料理店へ分配するから、容易に棒手振  
 の眼などへは入らぬ。若夫れ長さ三寸に餘る白魚が棒手振の籠に現はれ、或は  
 蛤鍋屋の寄鍋に上るやうになつては、白魚も早や末路で、江戸名物も何もあつ

たものではない。

一日一筆

(一) 五分間

用があつて兜町の紅葉屋へ行く。株式仲買店である。午前十時頃、店は掻き廻されるやうな騒ぎで、そこらに群がる男女の店員は一分間も静坐しては居られない。電話は間斷無しにチリン／＼云ふと、女は眼を峻しくして耳を傾ける。電報が投げ込まれると、男は飛びかよつて封を切る。洋服姿の男がふらりと

入つて来て『郵船は……』と訊くと、店員は指三本と五本を出して見せる。男は『八五だね』とうなづいて又飄然と出てゆく。詰襟の洋服を着た小僧が、汗を拭きながら自轉車を飛ばして来る。上布の帷子に兵子帯といふ若い男が入つて来て、『例のは九圓には賣れまいか』と云ふと、店員は『何うして〜』と頭を掉つて、指を三本出す。男は『八なら此方で買はあ、一萬でも二萬でも……』と笑ひながら出て行く。電話の鈴は相變らず鳴つてゐる。表を見ると、和服や洋服、老人やハイカラや小僧が、所謂『足も空』といふ形で、残暑の烈しい朝の町を駈け廻つてゐる。

私は椅子に腰をかけて、唯茫然と眺めてゐる中に、滿洲從軍當時のありさまを不圖思ひ泛んだ。戦場の混雑は勿論これ以上である。が、その混雑の間にも軍隊には一定の規律がある。人は總て死を期してゐる。随つて混雑極まる亂軍の中にも、一種冷靜の氣を見出すことが能る。而もここの町に奔走してゐる人

には、一定の規律が無い、各個人の自由行動である。人は總て死を期してゐない、寧ろ生きんが爲に焦つてゐるのである。随つて動搖又動搖、何等冷靜の氣を見出すことは出来ない。

株式市場内外の混雑を評して、火事場の様だとは云ひ得るかも知れない。軍のやうな騒ぎと云ふ評は當らない。ここの動搖は確に戰場以上であらうと思ふ。

(二) へボン先生

今朝の新聞を見ると、へボン先生は二十一日の朝、米國のイーストオレンヂに於て長逝せられたとある。へボン先生と云へは、何人もすぐに名優田之助の足を聯想し、岸田の精錡水を聯想し、和英字書を聯想するが、私もこの字書に



就ては一種の思ひ出がある。

私が十五歳で、築地の府立中學校に通つてゐる頃、銀座の舊日報社の北隣——今は額縁屋になつてゐる——にめぐましの床店同様の古本店があつた。その店頭、その店頭の雑書の中に積まれてゐるのは、例のヘボン先生の和英字書であつた。

今日では是以上の和英字書も數種刊行されてゐるが、その當時の我々は先づヘボン先生の著作に縋るより他は無。私は學校の歸途、その店頭に立つて『ああ、欲しいなあ。』とは思つたが、價を訊くと二圓五十錢也。無論、わたしの懐中には無い。しかも私は書物を買ふことが好で、『お前は役にも立たぬ書物を無闇に買ふので困る。』と、毎々兩親から叱られてゐる矢先である。此際、五十錢か六十錢ならば知らず、二圓五十錢の書物を買つて下さいなどと云ひ出して、お小言を頂戴して空しく引退るに決つてゐる。何とか好智慧は無いか知らぬと

歸る途次も色々に頭腦を悩ました末に、父に對つて斯ういふ嘘を吐いた。

學校では今月から會話の稽古が始まつた。英語の書物を讀むには英和の字書で濟むが、英語の會話を學ぶには和英の字書が無くては成らぬ。就てはヘボン先生の和英字書を買つて貰ひたい。殊に會話受持のチャペルと云ふ教師は、非常に點數の辛い人であるから、會話の成績が悪いと或は落第するかも知れぬと實事虚事打混せて哀訴嘆願に及ぶと、案じるよりも産むが易く、ヘボンの字書なら買つても可いと云ふことになつて、すぐに二圓五十錢を渡された。父は私の申立を一から十まで信用したか何うか判らないが、兎に角にヘボンの字書ならば買つて置いて損は無いと云ふ料見であつたらしい。其當時に於ける彼の字書の信用は偉いものであつた。

その字書は今も私の書齋の隅に押込まれてゐる。今日では餘り用をなさないので、私も殆ど忘れてゐるが、今や先生の訃音を聞くと同時に、假に彼の字書

を思ひ出して、塵埃を掃いて出して見た。父は十年前に死んだ。先生も今や亡  
 矣。その當時十五歳の少年は、思ひ出多きこの字書に對して、そとろに我身の  
 秋を覺えた。簾の外には梧の葉が散る。(明治四十四年九月)

## (三) 品川の臺場

陰つた寒い日、私は高輪の海岸に立つて、灰色の空と眞黒の海を眺めた。明  
 治座一月興行の二番目を目下起稿中で、その第三幕目に高輪海岸の場がある。  
 今初めてお目にかゝる景色でも無いが、兎にかくに筆を執るに當つて、その實  
 地を一度見たいと云ふやうな考へで、わざ／＼こゝまで足を運んだのである。  
 海岸には人家が連つて了つたので、眺望が自由でない。且は風が甚だしく寒

いので、更に品川の町に入り、海寄りの小料理屋へ上つて、午餐を喫ひながら  
 硝子戸越しに海を見た。暗い空、濁つた海。雲は低く、浪は高い。彼の「お臺  
 場」は、泛ぶが如くに横はつてゐる。今更ではないが、これが江戸の遺物かと  
 思ふと、私は何とは無しに悲しくなつた。

今日の眼を以て、この臺場の有用無用を論じたくない。およそ六十年の昔、  
 初めて江戸の海にこれを築いた人々は、これに依て江戸八百八町の人民を守ら  
 うとしたのである。其當時の徳川幕府は金が無かつた。己むを得ずして悪い銀  
 を造つた、随つて物價は騰貴した、市民は難澁した。また一方には馴れない工  
 事の爲に、多數の死人を出した。此の如く上下ともに苦みつゝ、豫定の十一ヶ  
 所を全部竣工するに至らずして、徳川幕府も亡びた、江戸も亡びた。しかも江  
 戸の血を享けた人は、これに依て江戸を安全ならしめようと苦心した徳川幕府  
 の當路者と、彼等自身の祖先とに對して、努力の勞を感謝せねばなるまい。

今日は品川荒神の秋季大祭とか云ふので、品川の町から高輪へかけて往來が劇しい。男も通る、女も通る、小兒も通る。この人々の阿父さんや祖父さんは、六十年前にこゝを過ぎて、工事中のお臺場を望んで、「まあ、これが出来れば大丈夫だ」と、心強く感じたに相違ない。而もそれは殆ど何の用を爲さず、空しく渺茫たる海中に横はつてゐるのである。

荒神様へ詣るも可い。序にこゝを通つたらば、霎時この海岸に立つて、諸君が祖先の勞苦を忍んで貰ひたい。併し電車で歸宅を急ぐ諸君は、暗い海上などを振向いても見まい。

(四) 日比谷公園

友人と日比谷公園を散歩する。今日は風も無くて暖い。芝原に二匹の犬が巫山戯てる。一匹は純白で、一匹は黒斑で、どこから啣へて来たか知らず、一足の古草履を奪合つて、追ひつ追はれつ、起きつ轉びつ、左も面白さうに狂つてゐる。

「見給へ、實に面白さうだね。」と友人が云ふ。「むよ、いかにも無心に遊んでるのが可愛い。」と云ひながら不圖見ると、白には頸環が附いてゐる。黒斑の頸には何も無い。「片方は野犬だぜ。」と云ふと、友人は無言にうなづいて、互に顔を見合せた。

今、無心に睦じく遊んでゐる犬は、恐く何にも知らぬであらうが、見よ、一方には頸環がある。其安全は保障されてゐる。而も他の一方は野犬である。何時虐殺の悲運に逢はないとも限らない。或は一時間乃至半時間の後には、残酷な犬殺しの獲物となつて其の皮を剥がれて了ふかも知れない。日暖き公園の眞

中で、愉快に遊び廻つてゐる二匹の犬にも、これほどの幸不幸がある。

犬は頸環に因て、その幸と不幸とが直ちに知られる。人間にも恐らく眼に見えない運命の頸環が附いてゐるのであらうが、人も知らず、我も知らず、所謂『一寸先は闇』の世を、何れも面白さうに飛び廻つてゐるのである。我々も斯うして暢気に遊び歩いてゐても、二人の中の何方かは運命の頸環に見放された野犬であるかも知れない。

『おい、君。そこらで酒でも飲まう。』と、友人は云つた。

### 木鼠忠太の死

古い葛籠の底からこんな寫本を見付け出した。紙は古びて墨の色も明瞭でないところがある、加之も所々には虫蝕の痕があるので、全編を通讀するには餘ほどの困難を感じたが、兎も角も辿りくつて讀んでゆくと、大略先づこんなものであつた。虫蝕で字體や文章の覺束ない所は私が勝手に加筆したので、新舊混同、木に竹を接いだやうな所が無いでもないが、それは豫じめ御容赦を願つて置く。標題の「木鼠忠太

の死」といふのは、私が好加減に擇んだので、原本には標題が附けてなかつた。文體は平家物語を模したやうなもので、餘ほど古いものに相違ないと思はれる。扱其の本文は……。

五條の扇屋に行き向ひし姉輪平次主従は、敦盛の卿の首打つて戻りけり。鎌倉へも此由早速に披露に及びければ、いしくもしたり、熊谷ほどの剛の者が討洩しつる敦盛を安々と討つたるこそ天晴れの功名なれ、恩賞としては山城大和の二ヶ國の中にて然るべき莊園をも賜はるべき旨、鎌倉殿よりも内々に沙汰せられければ、姉輪は大に面目を施しつ、源平此のたびの合戦に功名をあけたる大剛の武士も數多けれど、この平次に肩を駢べん者はよもあらじなど、傍若無人に説き誇りけり。誠にたぐひなき名譽ぞかすと、聞く者いづれも羨み合へり。さる程に、姉輪が取りて歸りしは敦盛の偽首なり、眞は扇屋の娘桂子の身替りなりけること臆けならず知れ渡りければ、今まで羨みたる人々も俄に唇を

ひるがへして、姉輪の不覺をあざけり誹らぬは無かりけり。姉輪も世の笑ひを恥ぢたりけん、引籠りて出でず。此のこと再び鎌倉に聞えければ、營中にても評議あり、偽首も首にこそよれ、女を男と見まがへて取り歸るほどの不覺者は、他の懲戒なり、重き處刑に行はるべしとぞ評議一決したりける。姉輪斯くと聞くより恐れ惑ひて、日頃は猿よりも赤き顔の、一夜の中に藍よりも蒼くなりけるこそ哀れなれ。此のまゝに打過ぎたらんには我が命も危し、如何にせばやと晝夜肺肝を碎きしが、やうくに斯うと思ひ定めけん、忠太召せと召されけり。

姉輪が一の家來として世に聞えたる木鼠忠太、早速に罷り出でて御用を承はらんと申す。姉輪は大の眼より熱き涙をほろくくと流して、いかに忠太、曩の日無官大夫の首討つたること、抜群の功名と世にも人にも褒められて、恩賞の御沙汰あるべき日を指折り數へて待ち暮しつるこそ果敢なけれ。彼の首も今は

偽首と極まりぬ、我は鎌倉殿の怒に觸れて壺をも知れぬ身となりぬ。此上は如何にせば好かりなん、如何にせば悪しかりなん、汝の分別聞かまほしうこそ候へと、聲を顛はしてぞ語りける。忠太も夢の心地して暫しは云ふべき詞を知らず、やゝありて恐るゝ申しけるは、扇屋の娘の身替りとも存ぜず、一圖に教盛の卿の御首ぞと心得て、うまゝと彼の狸爺に欺かられつること、返すくも無念の儀にこそ候へ。それがし直ちに扇屋へ行き向ひて、上總夫婦は申すに及ばず、家にある扇折の女子共の首一々に捻ぢ切つて、當座の腹癒せ仕らんと太刀押取りて起たんとす。

姉輪押止めて申しけるは、われに偽首を差出したるほどの上總夫婦が、争でかおめくとしてあるべきや、恐くは熊谷めが入智慧にて遠き國に身を隠しつらん。たとひ彼等を尋ね出して討つたりとて、わが不覺の罪を償ふべきにあらず。所詮我々は草の葉に置く朝の霜にも似たる身の上ぞかし、徒らに消ゆるを

待たんは愚かなり。差當りては鎌倉殿の怒を解くべき手段こそ肝要と存するなれ、其の手段を汝に申し聞かせばやと云ふ。忠太やうくに色を直して、仰せ御道理に候、して其御手段は如何やと問へば、姉輪は濁みたる聲を低めて、餘の儀にもあらず、汝の一命を我に與へよ、汝の首を討つて鎌倉へ渡すなりと云ふ。忠太あつと驚きて、兎かうの返答に及ばず、秋風にさやぐ芒尾花のやうに身を顛はしてぞるたりける。逃ぐるるとて逃すまじき主の氣色のすさまじければ忠太わななきながら平伏して、おそろしきことを仰せらるゝもの哉、それがしは命の惜しう候、唯免したまへ、救はせ給へと泣く。

さりとは卑怯なる奴よと、姉輪は少しく聲を暴らけて、汝も武士の一人にあらずや、武士の道を知らでは叶ふまじきぞ。主の大事となりける時に、身を以て代るが家來の習なり。汝の首を鎌倉殿にさよけて、教盛の偽首を受取つたる當人は此の忠太にこそ候へ。おのれの不覺によりて上を欺き、二つには主の面

に泥を塗りたる奴、免し置くべきにあらざれば直ちに成敗仕りぬ。何とぞそれかしの罪は御免候へと、さまざまに嘆き申しつ。一方には梶原殿に厚く賄賂して、御前の首尾宜しきやう頼み入らば、十に八九は事成就して、姉輪に咎め無かるべし。斯くて我に恙なく、わが家長く繁昌せば、我も満足なり、汝も定めて満足ならんと、さまざまに詞を盡してぞ諭しける。主こそ満足なれ、家來に取りては近頃難儀の事なり。忠太は物の恐ろしさに前後も辨まへず、唯御免候へと繰返して、泣くより外に事ぞ無き。姉輪はいよく、氣色を損じて、やあ忠太、畜生も三日飼へば主の恩を知ると云へり。汝が今まで洛中にのさばり返りて、忠太は弱いが旦那は強いと、大手を振りて罵り誇りしは、そも誰が恩と思ふぞ。皆是れ我が餘光にあらずや。然るに今此の期に及びて、主に代るべき命を惜むなんと日本一の不忠者とこそ存じ候へ、忠太といふ名にも耻ぢよかし。汝が今こゝに、潔く相果てなんには、末代までも忠臣の美名を輝かすべきぞ。

潔く死ぬ、疾うく死ぬよとぞ吐りける。

忠太は酸漿ほどの涙を拭ひもあへず、打顛ひつゝ申しけるは、それがし今日まで御恩を受けたりと申せども、いたづらに祿を盗めるにもあらず、分相應の御奉公も仕つて候。曩の日、殿が大力の熊谷に投げられて、腰の抜けたるやうに倒れ轉び給ひし時にも、それがし御側に在合はさずば誰か御介抱申上ぐべき。熊谷に睨まれて恐れを作し、僞首を受取りて早々に逃げ歸り給ひしは、正しく殿の不覺にて、忠太の罪にては露ばかりも候はず。申譯に腹切らでは叶まじき時節に候はど、殿こそ潔く御腹召され候へ。忠太御介錯仕るべしとて、容易に承知すべき氣色も見せず。姉輪いよく、哮りて、おのれ憎い奴かな、主君の爲に我身を生贄とするは武士の道とは存せぬか。家來の命は主のものよ。いで其儀ならば主が手づから成敗せん、そこ一寸も動くなと太刀抜き放ちて立向ふ。忠太も今は逃れ難しと見て、これも太刀をぬきて防ぐ。二人ながら大の

臆病者なれば初めより太刀筋は亂れたり。たがひに間近うは進み寄り兼ねて、遠き方より懸聲のみぞ勇ましく聞えける。

差して廣くもあらぬ屋敷の内なれば、此騒動早くも洩れ聞えて、忠太の弟忠二、忠三の二人あわたどしく走せ參る。先づ双方を取鎖めて仔細を問ふに、姉輪は彼を不忠者と罵る。忠二忠三暫らく思案して、殿の仰せこそ眞に道理に當つて候へ。主君の命とあらば是非を論ずべきにあらず、腹切れとあらば即座に痛き腹を切るが武士の道なり、忠臣の法なり。いざ尋常に腹召され候へとて、左右より兄を取圍みつゝ犇めきけり。この二人は兄よりも心ざま少しく猛かりければ、忠太も争ふに由なくて、唯おめくと控へてゐるに、姉輪はいよく勢ひを得て、疾うく腹切れとぞ責めたりける。時しも春の夕暮に、入相の鐘おとづれて、庭の櫻の吹雪と散りかよるは、忠太が最期を催すにも似たり。花は三芳野、人は武士、いざ尋常に生害あれやと、兄弟口々にすゝむれど、忠太

飽までも生きんとして、隙を窺ひ逃げゆくの、忠二追ひかけて其手を捉へ、忠三走り蒐つて其足を取る。忠太は比魚目かなんどのやうに仰けさまに倒れつゝ、聲を限りに助けを叫べど、兄弟は捉へたる手を弛めず、姉輪は馬乗りに踏ん跨がりて其胸をぐさと刺し貫けば、死にともなやと叫びつゝ、忠太は敢なく討たれけり。其首を鎌倉に送りて、豫て巧みし如くに云ひ拵へければ、鎌倉殿の怒も漸く解けて、姉輪に咎は無かりけり。

命を抛つて主を救ひし木鼠忠太は、武士の道を守りし者よ、世にも稀れなる忠臣よと、仔細を知らぬ人はいづれも涙を流して感じ合へり。忠二忠三も好き兄を持ちたりとて、人に褒められけり。忠太の一子小忠太は、餘りのおそろしさに武士を捨て、有徳の町人の婿となりて、一生を安らげく送りしとぞ。昔は斯る事もありけらし。



### 鎌倉時代に新聞 が有つたならば

七百年前には新聞が無かつた。有名なる曾我兄弟の復讐始末も、僅に曾我物語や東鑑や大日本史等に依て、その一斑を臆けに推知するに過ぎぬ。若し此時代に新聞紙が発行されてゐたならば建久四年五月末から六月初旬にかけて、曾我兄弟の記事が如何に其紙面を賑はしたであらうか。先づ五月二十九日朝刊の鎌倉各新聞欄外に、二號若くは初號の活字を以て、左の記事が現はれる。

### ○富士野狩場の大椿事

(曾我兄弟、井手館を鬧す)

二十八日午後十一時二十五分、曾我祐成、曾我時致の兄弟は富士野の狩場に忍び入り父の仇と稱して工藤祐經を斬殺せり暗夜と云ひ大雨中なれば混雜甚だしく他にも死傷多かるべき見込なり加害者は未だ縛に就かず。(二十八日午後十二時靜岡發)

續いて二十九日の午前十時頃には、號外々々の聲が頻に聞える。其第二報である。

### ○狩場の大椿事續報

狩屋を鬧したる曾我兄弟の中、兄の十郎祐成は仁田四郎忠常に討れ弟の五郎時致は頼朝公の御座所を犯さんとして小舎人五郎丸に捕へられたり前報の工藤祐經以外に愛甲三郎海野小太郎等死傷十餘名あり頼朝

公には御別條無し。(二十九日午前七時靜岡發)

これと同時に各新聞社ではすぐに記者を現場に出張させる。單にそれだけでは報道機敏を以て誇る譯には行かないので、例の如く四方八方に記者を走らせて苟且もこの事件に關係ある者は片つ端から訪問して、其談話やら寫眞やらを掲載する。記者はいづれも早馬で、谷七郷は云ふに及ばず、大磯小磯化粧阪の果から果まで駆け廻る。

誰の考へも同じことで、先づ第一に大磯の虎を訪問する。虎は病氣と稱して面會を謝絶する。何でも是非逢ひたいと、各社の記者は揚屋を取巻いてわい／＼云ふ。加之に寫眞を貸せと云ふ。寫眞は一枚も無いと云ふ。そんなら肖像を描せろと畫工同道で押掛けて来る。到底制し切れぬ大混雜である。

混雜はこよばかりで無い、更に會我中村を見よ。こよにも數十名の新聞記者が襲ひ來つて、狭い浪宅は身動きもならぬ光景。會我の母滿江、これも病氣で

面會謝絶。家來の鬼王が代理で應接頗る忙しい。記者は八方から鬼王を取巻いて、色々の質問の矢を向ける。甚だしきに至つては、こよの家は名代の貧乏會我といふが、借金は約そ何の位あるなどと聞く。迂濶口を利けば、すぐに手帳に止められるのだから怖しい。新聞記者と籤蚊に攻められた鬼王、汗を拭きながら弱つてゐる。

記者の一隊は大膽にも北條の屋形に向つた。會我兄弟の烏帽子親たる縁故を以て、今回の事件に對する北條の感想を問はうとするのであつた。時政は「え、煩さい」と云ふので、門前拂ひを食はせる。記者は中々立去らない。俸の義時が出て來て「皆さん、どうも御苦勞ですな。」と先づお世辭を振蒔き、それから辯舌滔々と二三分も辯じる。其中にお茶が出る。菓子が出る。記者等は大きに要領を得て「流石は北條だ!」と皆満足して引揚げる。

又一方には、被害者工藤の屋形を訪問した連中がある。これは劍もほろよの

挨拶で、躊躇してゐれば長巻で向ふ脛を搔つ拂はれさうな勢ひに、流石の記者連も辟易して立去つた。其結果、翌日の新聞紙上には、工藤一家に同情した記事は一行も見えない。皆一齊に筆を揃へて、工藤の横死は自業自得であるかの様に記し、しかも其遺子犬坊丸は有名なる不良少年であると云ふことまで書加へてあつた。

何しろ、翌三十日の各新聞紙上は實に賑かなもので、先づ富士方面の出張記者の通信として、曾我兄弟討入の模様から十番斬、十郎最期、五郎召捕までを一々に項を分つて報道し、十郎を討ち取つたる仁田四郎の談話、五郎を組止めたる五郎丸の談話、この騒動を目撃したる番卒の談話まで明細に記してある。更に振つてゐるのは鎌倉方面の記事で、先づ劈頭に彼の北條の感想を記し「曾我兄弟は世にも稀なる孝子である、勇士である、日本武士の龜鑑である。斯の如き孝子を罪するは情に於て忍びぬ。」云々と義時の談話を大々的に掲げ「斯く

云ひ終りて義時氏は悵然之を久しうせり。」と云ふやうな事が附記してあつた。或新聞の如きは、この際大いに北條の義心を賞讃し、兄弟の仇討は北條の尻押であるかの様に記したのもあつた。如何なる場合にも、北條は新聞を利用するのが中々巧い。

次は大磯の虎に關する記事で、各社ともに何處へ手を廻したのか知らぬが、兎にかく「一枚も無い」と斷られた其寫眞が麗々と掲げられてある。何でも高い金を出して、大磯の寫眞屋から種板を買収したと云ふ噂である。但し虎は面會を謝絶してゐるから、本人の直話と云ふものは無い、遣手や朋輩の談話を綜合して捏ち上げた記事であるが、仇討にゆく三日前に兄弟が遊興に來た事。其時には十郎は千鳥、五郎は蝶の模様の直垂を着てゐた事。その晩には脛の刺身で酒を一升ばかり飲んだ事。高麗寺の鐘が十二時を打つた頃にお引になつた事。明る朝十郎はまだ寝てゐるのを五郎が無理に引摺起して歸つた事。虎が五郎と

喧嘩した事。虎が茶碗で自棄酒を呷つた事。これ等は先づ普通の部で、更に探訪精細なるものに至ると、十郎が晝來た時に何うしたとか、夜歸る時に何うであつたとか、甚だしきに至つては閨房の祕事にまで立入つて、記者が得意の艶筆を揮つてゐる。虎と十郎との戀物語も、もう斯うなると詩的でない、繪畫的でない。

それでも新聞社ではまだく満足しない。兄弟の一言一行、餘さじものをと訝き立てる。曾我中村訪問の記事に依て、曾我の家では酒屋に十貫文、米屋に十五貫文、魚屋に六貫文の怠納がある事、家屋は鎌倉小町の五兵衛と云ふ者と、帷子の辻の七右衛門と云ふ者のところへ、二重抵當に入つてゐる事。その期限が來ても立退かず、催促に行けば五郎が亂暴を働くので債權者も持餘してゐる事。その他大小の祕密が残らず暴露されてしまつた。新聞記者に鋭く責め立てられて、鬼王も何から何まで白狀したと見える。

最も奇抜なるは、逆澤瀉の鎧を質に取つたといふ鎌倉材木座邊の質商藤六の談話で、これも新聞紙上に勿體らしく掲げられ、何の爲か知らないが本人藤六の寫眞まで載せてある。不思議な御縁で藤六老爺は、お疎末な面を世間へ紹介されることになつた。其談に曰く。

「左様です、曾我の御兄弟とは五六年前から御懇意に致して居ります。實を申すと、私共には根ツから有難くないお客様でな、へよよよ。これまで度々質物を頂いては居りますが、どれも是も踏めない代物ばかりで……。現に逆澤瀉の鎧なども、私方では金七枚が精々と申しましたのを、五郎さんが何うしても承知しませぬ、何でも八枚貸せと云ふ。それを斷ると、忽ち例の亂暴で、丁稚が二人投げ出されると云ふ始末。仕方無しにまあ八枚御用立しました。すると、また五六日經つてお出なすつて、實はこれから化粧阪へ行くのだが、少し懐中の都合が

悪い。勿論、少將と俺との仲だから、先方でもイザとなりやあ禰禰を脱いでも呉れるだらうが、何時もく達引せるのも餘り可哀想だ。それに物前でもあるから、今夜だけは幾許か持つて行きたい。就ては過日の鎧で、もう一枚上借をしたいが……と惚氣交りのお頼みでしたがわたしの方でも然うく好い顔ばかりは能ませんから、折角ですがお断り……と云ふと、まあ何うです、おのれ不埒の奴、其儀なれば俺にも料見があると突然に腰の物に手を掛ける、まるで押借か強盗です。好鹽梅にそこへ和田の朝比奈様がお出で、まあくそんな野暮を云ふな、そこらの野猪屋で一杯飲らうと、無理に連れ出して下すつたので、私もほつと息を吐きました。然う云ふ譯ですから、其後に鬼王さんが友切丸を持つてお出でしたが、體好く断わりました。へえ、あの御兄弟が富士の裾野で仇討を……。人は外見に依らないものですね。兄さ

んの方は溫和い人でしたが、弟の方は今申す通りの亂暴漢、随分商人や揚屋を泣かしたものでしたが、仇討とは豪いことを行りましたね。これが所謂大功は細瑾を顧みずとも云ふのでせうか。云々。

斯う云ふ風に、片端から洗ひ立をされると、孝も戀も其の美しい色が漸次に褪めて、終局には一向に價値の無いものになつて了ひさうである。

幸か、不幸か、鎌倉時代には新聞と云ふものが無かつた。曾我殿原の事蹟は新聞記者の筆に上らなかつた。裾野の雨、大磯の波、今も依然として、孝と戀との美しきローマンスを傳へてゐる。

五色筆 — (畢) —

大正六年十二月二十三日印刷  
大正六年十二月一日發行

(定價金七十錢)



著 作 權 所 有

◀ 五 色 筆 ▶

著 者 岡 本 綺 堂

發 行 者 川 口 陟

東京市下谷區池の端茅町二丁目十四番地

發 行 所 南 人 社

東京市下谷區池の端茅町二丁目十四番地

振替東京三三四二

印刷所

東京市本所區  
番場町四番地

凸版印刷株式會社本所分工場

再版

# 奇拔奔放の史眼

室津鯨太郎著 杉浦非水裝幀

## 秀吉論

美裝箱入四六版布表  
紙金文字入三百二十頁  
定價一圓二十錢  
郵税八錢

著者多年の蘊蓄を傾倒して本書を著せり、之を單に一個の英雄傳として見るも、所論陳套ならず潑刺として近代人の胸奥に觸る、古英雄の一舉手一投足、悉く現代に對照して諷刺あり諧謔あり皮肉あり、蓋し青年修養書として本書の右に出づるものあらざるべし。

■時事新報曰 概世の英傑豊臣秀吉が人と成りを縦横の觀察批判を加へし者史眼の精疏は一概に言ふ可からずと雖も、筆鋒の奇勁考察の辛辣讀者をして驚畏の眼を瞠らしむ

■やまと新聞曰 蓋世の英雄秀吉を各方面より評論したるものにして其戰略、智略、外交手腕、群臣操縱術、人心收攬法より私行情事に至るまで英雄の心理を遺憾なく解剖したるは流石に著者の史眼あるを偲ばしむ文章亦流暢なり

■大阪朝日新聞曰 豊臣秀吉を評傳した著作は今日迄既に可なりな數に達してゐるが其の内本書は此の古英雄を自由に觀察批評して彼の行動心事を別決し現代青年が秀吉を如何に觀るかといふ點を極めて興味深く明快に叙述したのを特色とする末尾に「秀吉年譜」を添へたのも深切で青年の讀み物として甚だ適當なものであらう

# 好評六版

讀賣新聞 漫畫記者 近藤浩一路先生著 裝幀並に挿畫百餘個

## 漫畫道中記

中版木版手刷表紙  
凸版漫畫百二十頁  
定價七十六錢  
送料六錢

近藤畫伯の漫畫は輕妙にして洒脫、加ふるに畫伯の妙文は更に其繪と相對して興趣深し、之を新しき旅行案内とする可、亦以て書齋銷閑の爲に讀むも可也、大正六年度の夏に於ける最も賣高多かりしは本書なり以てその内容を知らるべし。

文學士 沼波瓊音先生新著

## やなぎ樽評釋

菊半截三百九十頁木版  
刷箱入表紙更紗布張本  
定價九十五錢  
送料八錢

痛快に人情の機微をつかみ、然も洒々落落々人をして感嘆措く能はざらしむるもの彼の古川柳に如くはなし、短詩にして而も人間を縦横に解剖せる事數萬言の小説にも勝るは川柳なり、沼波文學士川柳を研究する事實に三十年今や其蘊蓄を傾倒し盡して本書を著す、先人恐れて容易に手をつけざるものも著者の明快なる評釋によつて始めて案を打つものなかるべからず。

# 好評三版

# ■ 南 人 文 庫 ■

□ 錢四稅郵・錢五十四冊一・頁十三百二截半菊 □

## 第一篇 ■ 新 世 帶 大倉桃郎著

著者は家庭小説家として既に令名あり、此書は家庭の讀物たらしめんとして其才筆を揮へる滑稽小説也、新世帯の記、鷄の糞、鎌倉へ、故郷の手紙の四篇を収む、何れもとりに面白きものなり。

## 第二篇 ■ 怪 談 情 話 室津鯨太郎著

本書には三つの情話を集めたり、鴛鴦の簪には戀死んだ許嫁の娘が妹の體を藉りて其男と同棲せし物語、振袖火事はお露とお島の戀を描ける丸山の怪火、嬌賊は巨商の娘お雪の死についての昔の騙り話。

## 第三篇 ■ 大 正 蠻 骨 傳 弓館小鱈著

萬朝報記者にして天狗俱樂部員なる著者、特意の才筆を揮つて剛健なる學生の物語を綴る文章洒々落落、記す事又痛快淋漓。青年の讀物として好評噴々たり。



364

348

終